

発達障害学生の理解と支援②

支援のための向き合い方と支援方法

北海道武蔵女子短期大学経済学科准教授
一般社団法人産学協働人材育成コンソーシアム プロگرامコーディネーター
公認心理師・臨床心理士

宮本 知加子



前稿では、発達障害のある学生の数や特徴、

筆者がこれまでに実践してきた教員免許更新講習¹での事例検討を紹介しながら、発達障害の個人特性や困り感の実態を掴む難しさについて取り上げた（宮本、二〇二二）。二回目の本稿では、教員免許更新講習での実践を踏まえ、先生方がどのように発達障害を理解し、支援しているのか、また、障害者差別解消法の改正によって、障害のある学生への合理的配慮が義務化されるのを前に、どのように発達障害のある学生を理解し、向き合って支援していけばいいのかを考えたい。

なお、本稿での発達障害学生とは、主に、注意欠陥・多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）、限局性学習障害（LD）といった診断が出ている学生だけでなく、発達障害とは診断されていないことも、大学生活や友人関係において難しさを抱えているなどの潜在的なニーズをもつ学生も含ま

れている²。

それぞれの大学では、学生相談をはじめ、様々な取組がなされている。筆者も学生と接しながら、日々過ごしている教員の一人である。学生と接する教職員や企業担当者が、若者を一緒に育成していくためには……という視点で読んでいただけたらと思う。

理解の難しさの共有と環境の最適化

前稿は、事例をもとに、「アスペルガー」という言葉にミスリードされてしまい、当事者である生徒の特徴が見えづらくなるケースを紹介した。それくらい、発達障害の特徴は微妙で、個人差やそれまでに受けてきた支援によっても大きな違いがある。さらに、その特徴の現れ方は、子供の年代によっても違ってくる。

発達障害のある子供は、その程度にもよるイントは、ユニバーサル・デザインの発想で考えることである。また、筆者は、魔法のような対処法はないと伝えていた。社会性を身に付けさせようとしていくと、社会の常識はこうだ、こうあるべきだと決めつけてしまうことがある。しかし、そういった枠組みをあてはめ、それに従わせようとすることこそ、発達障害のある人には理解しづらい場合があり、負担となってしまう。それよりも、当事者をよく見て、当事者にあつた環境を作る、話し合つて最適化することが重要ではないだろうか。自分の能力が発揮できる場があれば、大いに能力を発揮してくれると心から思う。

〓何とかなっていればそれでいい〓という考え方

企業の方には、お叱りを受けそうなタイトルである。すべてが何とかなっていればそれでいいわけではない。ただ、指導・支援する立場の方は、当事者である児童・生徒・学生にできるようなってほしいために、「普通」を意識した指導をしてしまうことがある。それが時として、当事者、そしてそれを伝えたい人も苦しめてしまうことがある。

当事者は、普通ができない自分はダメなんだと自己評価が低くなり、できない自分を責めてしまう。

が、小学校の低学年時に現れやすい。例えば、教室で落ち着いて座ることができない、友達に手を出して喧嘩をしてしまう、一緒に遊べない……という状況は、よく聞かれる。しかし、発達の偏りやそのペースは様々であるが、他の子供たちと同様にたくましく成長していく。大学生くらいの年ごろになると、他者の言っている意図が汲み取れずに困ることはあるにせよ、もう一度聞き返して教えてもらうというスキルや、「ありがとう」、「ごめんね」をしつかりと伝えて、助けてもらうスキルを身に付けている学生もいる。そのように見てみると、何も発達障害に限ったことではなく、対人関係の根幹にある信頼関係を築くことが何より重要なのだと気づかされる。

講習では、折角、幼稚園から、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・養護教諭と様々な免許をもつ先生方が集合されているため、免許の種類がバラバラになるようにぐうまくいってほしいのに、できないことを責めてしまうのは、指導・支援する側としても、責めたいわけではなかったのに……と、後悔してしまうことがある。そこで、助けになるのが、〓何とかなっていれば、それでいい〓という考え方である。

これまで、教員免許更新講習を実施してきた、先生方に一番コメントをいただいたのは、この言葉のように思う。講習で私を感じていたのは、先生方の児童・生徒を理解したいという想いと、自分の教育、自分の子供に対する対応が間違っているのではないかと不安であった。先生方はとても熱心で教育のプロだからこそ、学習のみならず、友達との遊びや集団での面白さ、感動も一緒に味わえるようになってほしい、また、大人になったときに困らないような社会性を身に付けてほしいとの想いがある。その想いが、先生方ご自身の教育活動の中で、時に、焦りや無力感を覚えるときがあるのだろう。

発達の途上にあつて、まだまだバランス感覚はよくないかもしれないけれども、何とかなっているな、という考え方は、当事者を追い詰めることなく、心の余裕をもち、うまくいっている面をみようとするための言葉なのかもしれないと考えている。したがって、研修の最後には、〓何とかなっているなら、それでいい〓くらいの気持ちで、ということを必ずお伝えしている。

講習後の先生方の感想を一部抜粋して紹介する。



宮本知加子（みやもと・ちかこ）

九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻博士後期課程修了。博士(心理学)。公認心理師、臨床心理士。専門は、産業・組織心理学、臨床心理学。スクールカウンセラーや発達教育センターでの教育相談員の経験をもつ。前任校ではキャリア教育やインターンシップを担当。令和5年(2023)より現職。令和6年4月開学の北海道武蔵女子大学就任予定。

「発達障害のある生徒を支援できるようにならなければ」という考えが強かった私の頭と心が少し柔らかくなることができました。「支援しなければ」というより、「理解しよう」「共に考えよう」という考え方をした方が、支援する方もされる方も追い詰められないことに気づけたのが、一番の大きな収穫です。

六・五%³と言われる、何らかの支援を必要とする児童・生徒の比率が、平均よりかなり上回っている本校の現状があります。講習では、発達障害だけを見るのではなく、気持ちも含めて子供の全体像を捉える事が大事であり、そのためにも偏見や固定観念にとらわれる事なく、心に余裕をもって一人一人の事例に気持ちを返しながら対処していく必要があると学びました。

「何とかなっているなら、それでいい」という言葉に勇気づけられました。焦ってはダメですね。思うようにならなくて当たり前ですよ。生徒は、私に叱られても、次の日は元気に登校して笑顔をくれます。生徒から学ぶことが多いと感じました。

様々な校種の方との交流の中で、子どもの年齢は違っていますが、抱えている困り感は、同じだということが分かりました。また、先生が最後に言われた「何とかなっているなら、それでいい」

という言葉に安心しました。子どもと向き合っている時は必死で、戦っているような気持ちでした。自分のやってきたことが良かったのか不安でしたが、発達障害のある子が落ち着いたり、学級の雰囲気少しでも良くなったことを思い返すと、良かったんだなあと思えるようになりました。

発達障害学生の本来の力が発揮できるように

発達障害のある学生たちは、高い能力を有しているのに、その手前の段階で躓いていることが多くある。特に、インターシップでは、本来の業務内容ではなく、その段取りや社員とのコミュニケーションが取れていないことから、「仕事ができない」と思われてしまい、学生自身も自信を無くしてしまうことがある。

そこで、仕事（インターシップ）で直面しやすい問題の対処法について、具体策を考えておくことが有用である。「しっかりと確認してね」、「逆算して考えてみて」といった、抽象的な助言ではなく、より具体的な方法を提示することが解決法につながる。インターシップで活用しやすいものを表に示す。

それから、事前にできる支援は、学生と対話し、困りそうな場面について事前にコミュニケーションしておくことである。また、事前に担当者に特性を伝えて理解を

うという考え方であり、「障害」ではなく、脳の「個性」の一つであるという見方である。まさに、「脳は、みんなちがって、みんないい」である。

これまで、教員免許更新講習での実践を先生活との学びや気づきも含めてお伝えしてきた。学生が、どのような先生方に支えられて成長してきたのかを知っていただける機会と考えたからである。筆者も含め、大学関係者は、このような周りの支援を受けてきた学生たちを引き継いでいるということになる。最後のバトンを渡されたのが、この高等教育機関である。

筆者は、発達障害の当事者の周りの人たちが支援できるようになると、それは専門家だけでなく、成長の場を与えられるものと考えている。

表 仕事の段取りに関する対処法

① スケジュール管理<遅刻、締め切りを守れない> 好きなことなどに没頭してしまうと時間を忘れてたり、どれくらいの時間でできるかといった時間の読みが甘いことから遅刻をしたり締め切りを守れないことがある。そのため、日々の予定表を作成し、見えるようにしてから仕事を進めるようにする。ただし、詰め込みすぎないこと。スマホのカレンダーやアプリやリマインド機能は効果的。朝、職場まで何分かかるのかも、シミュレーションしておく。
② メモの取り方<何を、どれくらいの量のメモをとるのが難しい> インターシップでは、「メモを取りなさい」と指導されることが多い。しかし、何を取ればいいのか、どのくらいの量をとるかの判断は難しい。そのため、メモのフォーマットを作り、それに記入する。日付、目的、場所、など、必要となるメモの項目をあらかじめ作っておく。あるいは、書くことが苦手な場合は、写真で取らせてもらうこと（情報漏洩の可能性がある場合は注意すること）も有効。
③ 電話対応<臨機応変な対応が難しい> マニュアルがあればできることが多い。基本的に引き継ぐことができればよいのであれば、はじめの挨拶、相手の社名、名前を聴く、ということを示ナリオしておく。
④ 忘れ物の防止<うっかり忘れてしまう> 忘れないようにするというよりも、「思い出すタイミングをつくる」方がうまくいく。持参する物であれば、必ず通るところに置いておく、見えるところに貼っておく、1時間に1回確認するメモを作っておく……など、忘れても思い出せる工夫をする。
⑤ 報告・連絡・相談<いつ、何を伝えればいいのか分からない> 報告する内容やその順番のフォーマットを準備しておく。事前に、報告の時間を決めてルール化しておくともスムーズに伝えられる。

得た方がいいケースもある。筆者が担当したケースでも、日常的に修学支援が必要な学生の場合、直接担当者に連絡し、当該学生の特徴を説明し、どのようにすればうまくいくのかを伝えていた。そのような一つの連絡が、大きな安心感となり、漕ぎ出していけるケースは多くある。

ただ、このような支援に関する説明は、インターシップ担当者からでは難しい場合もある。学生相談のカウンセラーに依頼すれば、適切に伝えてくれるはずである。

そして、重要なのは、インターシップ後の振り返りである。これは、インターシップ科目として学びを深める意味もあるが、支援の観点からは、自己理解を深めるためである。インターシップから戻り、担当者は問題なかったと感じていても、できなかったと思ひ込み、落ち込んでしまっていることがある。このように、適切な自己評価ができていなければ、折角のインターシップでの経験がその後のスキルに結びつかないことがある。できているところを認め、課題を感じるころはその振り返りを行うことも、その後の職業選択に役立つ情報となる。

ただし、場合によっては、いきなりインターシップに行くのが難しいというケースもあるだろう。その場合は、各地域の就労支援施設につなぐことも有効である。学内でのアルバイト経験といったことから始めるなど、就労に関する経験を増やすために取り組む大学もある。

適切な支援ができる人が増えれば、その人の周りは支援できる人が育つ。支援できる人が増えれば、子供（大人も）は多くの人に支えられる。多くの人に支えられれば、子供（大人も）は持てる力を発揮する。と。インターシップ後も、ゼミ活動、就職活動と乗り越えなければならぬ場面が待っている。社会に出て活躍していくまでに、これからも周りの大人の一人として、力になりたいと思う。

参考文献

- 宮本知加子（二〇二三） 発達障害学生の理解と支援①―学生数の実態と学生理解のための研修の紹介、文部科学教育通信、No.563、pp.181-191.
- 村中直人（二〇二〇） ニューロダイバーシティの教科書 多様性尊重社会へのキーワード、金子書房

注

- 発達障害とは、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他のこれに類する脳機能障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの」（発達障害者支援法第二条）と定義されている。
- 筆者は、「発達障害の理解と支援への活かし方」というテーマで、平成二十五年から令和三年度まで（令和二年度は、コロナ禍のため中止）、前任校にて教員免許更新講習（選択科目、六時間講習）を担当した。対象は、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭、高等学校教諭、特別支援学校教諭、養護教諭。
- 二〇一二年に文部科学省が行った「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童・生徒に関する調査」において、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒（小・中学生）が六・五%であったことを指す。